

研究課題	大正大学学部生の日本語誤用分析
研究代表者	中島 紀子 (表現学部 表現文化学科 専任講師)

1. 研究目的

本研究は、学部の違う学部生に対して日本語使用の現状を調査した上で、誤用の実態を明らかにし、その所属する学部の専門の特質と誤用の関係を分析しようとするものである。学部を超えた調査を行い比較することで、最終的には大正大学全体の現状を把握することを目標に、専門別に学生の言語活動に活かせる提言ができることを研究目的としている。

日本語の誤用に関してはさまざまな研究があるが、その多くは「第二言語習得における誤用」「日本人帰国子女の日本語誤用」または「大学生のビジネス文書にみられる誤用」に焦点が当てられている。その中で、文化庁国語課が日本語母語話者に向け 1995 年より毎年行っている「国語に関する世論調査」では、さまざまな日本語の誤用事例が発表されている。文化庁の調査をそのまま流用している先行研究には、寺川（1999）の実証研究などがみられるが、女子短期大学の 1、2 年生に向けに 20 年前に実施されたもので、その後は更新されていない。

そこで、大正大学学部生の誤用使用実態を調べるため、2017 年と 2018 年に事前調査として、表現学部の新入生を対象に「敬語・ら抜き言葉・れ不足言葉・さ入れ言葉・授受表現」の 5 つの誤用に関してアンケート調査を行った。その結果を踏まえ、本研究一年目の 2019 年度に行った調査・分析から、特に「ら抜き言葉」と授受表現において「やる」の代わりに「あげる」を使う傾向が年々増えていることがわかった。

研究二年目にあたる 2020 年度においては、調査項目を「ら抜き言葉」と授受表現の 2 つの誤用に絞り、アンケート調査を続けるとともに、個別面接聴取により課題作文を含む誤用使用実態を明らかにし、誤用が生じる背景（原因）を探っていく。被験者それぞれの言語使用環境を比較することで、誤用使用にどのような影響を与えているかの分析を試みる。

2. 研究方法

本研究は、過去に行われた「国語に関する世論調査」の設問に倣い、大正大学学部生の誤用使用実態を明らかにする実証研究である。一年目に引き続き、文化庁国語科による誤用に関する大規模な調査研究である「国語に関する世論調査」、ならびに、「日本語検定」問題の誤答を分析することで、誤用の現状を再確認する。その後大正大学学部生の実態を調査するため、以下の調査方法を取り入れる。

(1) アンケート調査

「国語に関する世論調査」の調査項目を参考に、新入生全体に対してアンケート調査を行う。異なる「状況、動詞、文体等」を含む、「ら抜き言葉」ならびに授受表現「やる／あげる」の選択肢の入る問題文を用意し、「ら抜き言葉」また授受表現「あげる」が選択される要因を解明する。

(2) 個別面接聴取

被験者の学習環境（大学以前の国語教育）、また言語環境（家庭・クラブ活動・アルバイト等）に関する調査をするために個別面接聴取を行い、同時に「作文」による調査と「選択問題」による調査を併用する。

①作文による調査

可能表現の使用が必要な作文を課し、被験者が書いた文章に「ら抜き言葉」また授受表現「やる／あげる」の誤用がないか観察し分析する。

②選択問題による調査

動詞の特性を加味し、受身・尊敬形、可能形（肯定／否定）を取り混ぜた文章から、被験者の「ら抜き言葉」また授受表現「やる／あげる」の選択要因を分析する。

3. 研究成果と公表

2020年度の研究は、申請段階で予定した2割程の実施に留まった。第一の原因は被験者を集められなかったことにある。これまでアンケートを実施してきた一年生共通の授業科目が大幅に変更となったことに加え、大人数のクラスで被験者を募集したがほぼ協力者を得られなかった。また、研究者のオンライン調査に関する技能不足のため、アンケート調査の実施が困難を極めた。

(1) 誤用に関する現状把握

誤用の現状を、平成30年度ならびに令和元年度の「国語に関する世論調査」で確認すると、「ら抜き言葉」と授受表現を扱う年度ではなく、記載がなかった。「日本語検定」では、以下のとおり、可能形の「ら抜き言葉」の設問だけでなく、回答に「ら」を加える選択肢があり、「ら抜き」現象がさらに進んでいることがうかがえる。

※2020年度第1回は過去問題の記載なし

問3三 彼女が女優として長年（1 やってこれ 2 やってこられ）たのは、謙虚で人当たりのよい性格によるところが大きい。

（2019年度第1回）

問3三 今朝は電車内がひどく混雑していて、目的の駅で（1 降りられ 2 降りれ）ないのでと心配になるほどだった。

（2019年度第2回）

問3五 アルバイト先の家電量販店で、客に声をかけて商品を勧めるように言われたが、うまく（1 話しかけられ 2 話しかけれ）そうにない。

（2020年度第2回）

問 3 二 社会人になったら着付け教室に通って、自分一人で着物が（1 着れる
2 着られる）ようになりたい。（過去問題
ベストセレクション）

問 3 一 初めての遠泳で（1 泳ぎきれる 2 泳ぎきられる）か不安だったが、
何とかゴールにたどり着いた。
（2019 年度第 1 回）

また、授受表現に関して、菊地（2010）によれば、「やる」のいわばきれいな表現（美化語）として使われる傾向を一「やる」がぞんざいな表現だという性格を増すことと相伴って一強めている、とあり、9 年後に発表された滝島ら（2019）の調査でも、敬語の誤用とされてきた「植木に水をあげる」「（自分の）子どもにお小遣いをあげる」「ペットの犬にえさをあげる」に関しては、「おかしくない・自分でも使う」という人が 7 割を超え、誤用とは言えない状況になっている、という調査結果が示されている。

（2）アンケート結果

①日本語検定ミニテスト

自身の担当する単科授業において、2020 年 6 月 9 日 26 名、同 10 月 27 日 14 名に対し、日本語検定ミニテストを実施した。以下は「ら抜き言葉」に関する設問である。

4 級 問 2 一

傘を持っていたので、ぬれずに（1 帰ってこられ 2 帰ってこれ）ました。

3 級 問 2 一

来週の出張で、先方と契約を（1 結んでこられる 2 結んでくれる）よう努力します。

その結果、4 級の誤答が、それぞれ 26 名中 7 名（26.9%）・14 名中 3 名（21.4%）、3 級の誤答が前半のクラスでは 26 名中 11 名（42.3%）、後半のクラスは 14 名が全員正解だった。履修者は全員 3、4 年生で特に男女における有意差は認められなかった。4 級と 3 級に差が出たのは、「帰る」に「くる」がつく複合動詞に関しては使い慣れているが、「結ぶ」に「くる」がつく形は、特殊なケースで大学生にはなじみがなく、被験者は回答に確信がなく、結果が大きく振れたと考えられる。

②国語に関する世論調査（抜粋）

一年生向けの授業において被験者を募集したところ、以下のとおり、紙面で 22 名の回答を得た。

		(ア) を使う	(イ) を使う	どちらも使 う
(1)	(ア) こんなにたくさんは食べられない	12 名	1 名	9 名

	(イ) こんなにたくさんは食べれない	(54.5%)	(4.5%)	(41%)
(2)	(ア) 朝5時に来られますか (イ) 朝5時に来れますか	5名 (22.7%)	<u>12名</u> (54.5%)	5名 (22.7%)
(3)	(ア) 彼が来るなんて考えられない (イ) 彼が来るなんて考えれない	20名 (90.9%)	0名 (0%)	2名 (9.1%)
(4)	(ア) 今年は初日の出が見られた (イ) 今年は初日の出が見れた	9名 (41%)	7名 (31.8%)	6名 (27.2%)
(5)	(ア) 早く出られる？ (イ) 早く出れる？	8名 (36.4%)	2名 (9.1%)	12名 (54.5%)
(11)	(ア) 植木に水をやる (イ) 植木に水をあげる	6名 (27.2%)	5名 (22.7%)	11名 (50%)
(12)	(ア) うちの子におもちゃを買ってやり たい (イ) うちの子におもちゃを買ってあげ たい	2名 (9.1%)	<u>12名</u> (54.5%)	<u>8名</u> (36.4%)
(13)	(ア) 相手チームにはもう1点もやれな い (イ) 相手チームにはもう1点もあげら れない	8名 (36.4%)	8名 (36.4%)	6名 (27.2%)

※(6)から(10)の設問に関しては、「さ入れ言葉」の設問だったため割愛

紙面による調査においても、「来る」「見る」などの動詞に関しては「ら抜き言葉」が浸透している結果が出た。また、授受表現に関しても「やる」を使わず「あげる」を使う割合が増えている。一年目の結果と比較して、授受表現で(ア)を使うと答えた割合が減り、「どちらも使う」と答えた割合がいずれの設問でも10%以上増えている。

(3) 個別面接聴取

2020年12月25日に、表現文化学科一年生3名とオンラインにて個別に面接聴取を行い、被験者の言語使用環境(家庭・クラブ活動・アルバイト等)に関して調査した。また、「あなたが得意なこと(できること)」と「これまでにもらったり、あげたりしたプレゼント」の2つの題についても作文を書いてもらったが、その結果、こちらが意図した可能形の「ら抜き言葉」や授受表現を導くに至らず、実施方法を再考する必要性を痛感した。可能形として出てきたものは、「覚えることができる」「活躍できた」の2通りの言い回しにとどまった。

今年度は、新入生向けアンケートによる調査ならびに、個別面接聴取の被験者数が予定よりかなり下回ってしまい、コース間の比較まで研究を進めることができない

かった。実証研究として成り立たせるために、これまで紙ベースで行ってきたアンケートをネット上で行うなど実施方法を再検討することが今後の大きな課題となった。しかし、方法さえ確率できれば、調査・研究を進める見通しがたち、結果に結びつけることができると考える。本研究課題の成果については、過去に『大正大學研究紀要』第103号（2018）、『表現学』第6号（2019）において公表してきたが、今後も『表現学』において公表していく予定である。

【参考文献】

- 菊地康人（2010）「敬語再入門」講談社学術文庫
- 澤田淳（2020）「日本語の直示授受動詞「やる／くれる」の歴史」『国立国語研究所論集』第18号 p.149-180
- 滝島雅子・山下洋子・塩田雄大「相手選手に点を“あげて”しまってもよいのか～2019年「日本語のゆれに関する調査」から～」『放送研究と調査』NOVEMBER2019 pp.54-72
- 寺川みち子（1999）「東海学園女子短期大学版「ここ後に関する世論調査」—1998年4月調査—」『東海学園女子短期大学紀要』第34号 pp.41-66
- 日本語検定委員会（2020）『令和2年度版 日本語検定公式過去問題集3級』東京書籍
- 日本語検定委員会（2021）『令和3年度版 日本語検定公式過去問題集3級』東京書籍
- 古川駿雄（1995）「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要』第二部44号 pp.193-200
- 文化庁国語科（2019）『平成30年度 国語に関する世論調査—表記・読書・言葉づかい』ぎょうせい
- 文化庁国語科（2020）『令和元年度 国語に関する世論調査—感じ・言葉づかい・外国人と日本語』ぎょうせい
- 笠原孝治「国語の乱れ」を感じる人が減少傾向に 2019年度「国語に関する世論調査」—文化庁『内外教育』第6864号（2020年10月16日版）p.6-7